

非凡なる凡人大平さん

安井謙

私の頭から「あの日」のことがやきついて離れない。参議院選挙の告示日、昭和五十五年五月三十日。大平さんは当日、第一声を東京であげられることになっており、会場は新宿の私の選挙事務所前の広場であった。大平さんは三千人の聴衆を前に熱弁を振られた。ふだんは諄々として法を説くともいっつか、どちらかといえば説得型であった。ところが、あの日の演説は非常に調子の高い絶叫に近いものであった。聴衆も熱心に聞き入っていたが、私はいつもとはちよつと違つなという印象を受けた。しかしこれも今度の選挙にかけた大平さんのすさまじい意気込みの表れと受け取っていた。予定時間をかなり超過して演説は終わった。私は自分の挨拶をする前に、「お忙しいでしょうからどうぞお引き揚げ下さい」というと、少しもじもじしておられたが、「それではこれで」といって、そのまま乗用車で立ち去られた。これが大平さんとの最後のお別れになるつとは……。

組閣以来一年半有余、いよいよ脂が乗ってきた時であり、内外に問題の山積していた大切な時期に忽然として幽明境を異にされようとは、神ならぬ身の誰しもが夢想だにできなかったことである。

私の大平さんとの出会いは、大平さんが池田大蔵大臣の秘書官時代からだから、三十年以上になる。郷里も瀬戸内海を隔てて香川県と岡山県と差し向いであり、学校は「一橋大」と「京大」とそれぞれ異なっていたが、卒業年次、年齢もほぼ同じ頃で、議員になったのも相前後していた。池田内閣では一緒に閣僚を務めたこともあり、心情的には、大変親しい気持で接していたし、教えられることもまことに多かった。

大平さんは幼少から学生時代にかけて大変ご苦労されたと聞いているが、人柄は重厚そのものであった。思慮も深く、良く勉強もされたが、一面意志の強い人でもあった。だが、すべてが控え目で、自らどこへでもしやしやり出るようなタイプの政治家ではなかった。そして自分というものを常に反省しておられたように思う。今度の解散のきっかけになった例の不信任案が出る少し前であったが、たまたま宮中の晩餐会で隣の席にいた私に向つて「皆さんいろいろと憶測しているようだが、自分はガムシヤラに政権に執着するつもりはない」という趣旨のことをポツンといわれたのが、今でも印象的である。結果は反対の方へ動いたわけであるが。

大平さんのやられた仕事のうちで、特に私の印象の深かったことの一つは、第一次池田内閣での仕事振りである。池田内閣は安保改定問題をめぐり世の中が騒然としている最中に、岸内閣の後を受けて誕生した。池田さんは、一般から剛球投手という目で見られていた。だが池田さんは、組閣されるやそのイメージとは打って変わつて、「寛容と忍耐」をモットーに国民所得倍増をスローガンにして完全に政局を乗り切つたのである。この陰の演出者が当時官房長官であつた大平さんであつたことは、万人の認めるところである。

大平さんの逝去の原因は心臓の故障であつた。私どももそれほど心臓に障害があつたならば、平素もう少し用心の仕方はなかつたのかと残念な気持がしていた。葬儀が終わつてから志げ子夫人にいろいろのお話をうかがつたが、奥様さえ、平常は「心臓」についてはそれほど心配されていなかったとかがい、少し意外の感じがしたのであつた。だが後日『文芸春秋』（十二月号）の記事でも同じようなことが書かれており、人間の身体にはどこに落とし穴があるのか分かつたものではないと、本当に空恐ろしい気がする。

大平さんという人物を一言で評するならば、「非凡なる凡人」とでもいいえようか。誠に惜しい人を亡くしたものである。心からご冥福を祈る。

（参議院議員・前参議院議長）